心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2021

優秀作品集

小学生区分

香川県知事賞

内閣府 佳作

協力

観音寺市立観音寺小学校 六年

大谷（おおたに） 凜央（りお）

香川県

2021 心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター 優秀作品集

香川県知事賞	小学生区分	ポスター	観音寺市立観音寺小学校	六年	大谷凜央……表紙
香川県知事賞	小学生区分	作文	高松市立国分寺南部小学校	四年	湊良明……3
香川県知事賞	中学生区分	作文	高松市立太田中学校	一年	前田壮一朗……4
香川県知事賞	一般	作文	観音寺市		林凜々子……5
香川県健康福祉部長賞	小学生区分	作文	多度津町立多度津小学校	六年	大山凌雅……7
香川県健康福祉部長賞	小学生区分	作文	高松市立国分寺南部小学校	二年	川井悠暖……8
香川県健康福祉部長賞	中学生区分	作文	丸亀市立東中学校	一年	西岡亜美……9
香川県健康福祉部長賞	中学生区分	作文			匿名希望……10
香川県知事賞	中学生区分	ポスター	綾川町立綾南中学校	三年	田中遥琉……11
香川県健康福祉部長賞	小学生区分	ポスター	三木町立平井小学校	六年	小林文香……12
香川県健康福祉部長賞	小学生区分	ポスター	三豊市立下高瀬小学校	四年	藤田悠月……13
香川県健康福祉部長賞	中学生区分	ポスター	高松市立紫雲中学校	一年	菅紅羽……14
香川県健康福祉部長賞	中学生区分	ポスター	観音寺市立観音寺中学校	三年	原穂花……15

小学生区分
香川県知事賞

車いすって楽しいな

高松市立国分寺南部小学校　四年
湊（みなと）　良明（よしあき）

ぼくは、仏生山公園で開さいされたパラスポーツ体験会に参加した。その中でも、一番楽しそうだと思ったのが、車いすバスケットボールだった。

三年生の国語の時間に車いすについて学習した。車いすを押すのも、自分で移動するのも『とっても大変だ。』と思っていたのに、その車いすに乗ってバスケをするのだから、気になって仕方がなかった。

お母さんにお願いして、体験会に申しこんでもらった。会場に着くと、ちゅう車場で車いすに乗った男の人がいた。車いすをこぐうでは、とても力強くて、車いすに乗っているというだけで、何もぼくのお父さんや大人たちと変わりなかった。

ただ、声をかける勇気がでなかった。どう話しかけていいかわからなかったのだ。いつもならできるあいさつが、『こんにちは。』の一言が出てこなくて、ただじっと見てしまった。悪いことをしている気分だった。

受付をすませて、体育館に入るとコートの中では、すでに車いすに乗った選手が、ウォーミングアップをしていた。八の字に広がった細い車輪は、ぼくが授業で見た車いすとはちがって、かなりのスピードが出る。前に進むのも、後ろにもどるスピードもすごく速くて、本当にかっこ良い。向かいのコートでは、シュートが次々に決まっていく。何となく、『ぼくにもできる。』と思っていた。

体験を始める前に、車いすの乗り方の説明を受けた。車輪を動かしている時に、急に足が出ると大きなケガをするため、フットレストに足を固定された。他にも、体当たりのプレーがあるため、ベルトでおなか周りも固定する。床に落ちるとあぶないからだ。

ぼくたちのグループに教えてくれたお姉さんは、ふだんから車いすの生活をしている人ではなかった。たくさんの人に、車いすでスポーツをしている人のことを知ってもらう活動をしているのだ。お姉さんは、

「車いすに乗っているのは『事故でけがをした。生まれつき足がなかった。人それぞれに理由があります。面白そうにジロジロ見られると、悲しくなります。だから、今日、体験会に参加してくれたみんなには、本当は、みんなと同じようにスポーツができるんだよ。車いすに乗っているから変な人。と決めつけずに、あいさつをしてね。』と、たくさんの人に教えてくれると、とってもうれしいです。」

と話してくれた。

ぼくは、ちゅう車場でのことがはずかしくなった。だから、体験が始まってすぐに、選手のみなさんに向かって、一番大きな声で、

「お願いします！」

とあいさつをした。すると、みんながニコニコしながら、

「楽しくやろう。がんばろうな。」

「来てくれてうれしいよ。」

と声をかけてくれた。とても気持ちがよかった。さっきまでの気持ちも晴れた感じがした。

その後、車いすの操作を習った。前進はスピードが出て楽しかったが、後ろ向きは大変だった。後方が気になって首を動かすと、首を向けた方向に車輪が動いてしまうのだ。さらにむずかしかったのは、すわったままでのシュートだった。ゴールにすら届かない。選手のみなさんが、軽々と決めていたシュートは、練習の成果だと実感した。

もし、ぼくが事故で足を失ったら、スポーツができるのだろうか？と考えたけれど、体験で出会った選手のみなさんを通して、車いすがあったら楽しくスポーツができるのではないかと思った。そして、みんなの笑顔を見ていると、自然と楽しい気分になった。これからは、車いすの方にもはずかしがらずにあいさつするぞ！参加して本当に良かった。

中学生区分 香川県知事賞

内閣府 佳作

祖父から学んだ前向きな姿

高松市立太田中学校 一年 前田（まえだ） 壮一朗（そういちろう）

「壮一朗、よく来たなぁ。ゆっくりしていってな。」祖父の家に着くと、家中に響きわたるくらい元気な声でむかえてくれる。祖父は、おもしろいじょう談で場を和ませたり、農作業に生き生きと取り組んだりと、底ぬけに明るくて元気いっぱいだ。

このように、大変パワフルな祖父だが、身体障害者手帳を持っている。高校二年生の時に交通事故にあい、右足の先を切断したからだ。現在は、義足を付けて生活をしている。義足を付けて靴をはいていると、一見、障害があるようには見えないが、体を左右にふってバランスをとりながら歩いている。日常生活には大きな支障はないと聞いているが、正座ができなかったり、靴の脱ぎはきに時間がかかったり、サンダルやスリッパがはけなかったりと少し不便な面があるそうだ。

僕は幼い頃から、足の不自由な祖父と接してきたので、祖父のことを「障害を持っている」と感じたことは一度もない。義足を付けている姿を、当たり前だと思って生活をしてきたからだ。

交通事故にあった当初は、目の前が真っ暗になり生きる意欲を失ったそうだ。そんな時、祖父の友人がそれまでと変わらない温かい笑顔で普通に接してくれたことが大きなはげみになったと教えてくれた。祖父が退院してからは、海水浴にもさそってもらったそうだ。現在は、障害がある人を街でよく見かけるが、六十年近く前に、右足を失った祖父が、海水浴に行くということは考えられないくらい勇気がいることだと思った。「本当に行っても大丈夫だろうか」「変な目で見られるかもしれないなあ」と、不安に思っていた祖父に対して、友人たちは、祖父の姿を気にすることなく、自然に受け入れ、海水浴を楽しんだことをうれしそうに語ってくれた。

このような友人たちの支えがあったので、前向きに生きようと決心したと教えてくれた。

僕は祖父と一緒に過ごす時に、気を付けていることが二点ある。一点目は、段差や階段を上り下りする時に、手助けをすることだ。片足で立つとバランスをくずしてしまうので、手を引いたり、体を支えたりしている。これは、幼い頃からの習慣だ。最近はスロープが設置されている所が増えたので、僕がサポートをする機会が減ってきた。障害がある人にとって、生活しやすい環境が整備されていることはすばらしいと思うが、僕にとっては、祖父とのコミュニケーション場面が減り少しさみしい思いもある。

二点目は、重い荷物を持つ時にできるだけ手伝うという事だ。祖父は今でも現役で農作業をしている。収穫した野菜を運ぶ時重くて大変そうであるし、転倒するといけないので、祖父の家に行った時は必ず手伝うようにしている。それ以外の場面は、祖父は何でも普通に行っているように見える。本当は生活をしていくうえで、障害がない人よりも大変な場面や工夫が必要なことがあるのかもしれないが、それらを全く見せない姿から、学ぶことがたくさんある。僕もそのような祖父に応えるように、過剰に手伝うことは控え自然に接するよう心がけている。

祖父は障害があることを、つつみかくさず話してくれる。先日は、

「最新式の義足を注文したんや。」

と、得意気に話してくれた。義足は生活に欠かせないものなので、こだわっていると教えてくれた。

祖父は二十年以上、地域のためにボランティア活動を続けている。障害を持っているけれど積極的に取り組んでいる姿は尊敬できる。義足での生活は大変そうだが、常に前向きに過ごしている祖父が大好きだ。僕も祖父を見習って、明るく、前向きに進んでいきたいと思う。

一般区分 香川県知事賞

出逢いと一歩

観音寺市 林 凛々子

「気をつけてな～」私は何度、その声を聴いたことだろう。高校を卒業した私は、社会人として新たな一歩を踏み出した。社会人になり、大きく変化したことを言えば、寮生活から家族と過ごすようになったこと、スウェーデン製の車いすに乗り始めたこと、それから今まで全く気にもしなかった、明日の天気をチェックするようになったことだろうか。

良い天気の日には、自身の家周辺を散歩することが、最近のマイブームになっている。高校生時代までは、一人で外出してみたいなと思う気持ちはあったが、不安な気持ちのほうが強く、なかなか一歩を踏み出せなかったのだ。車通りは多いが、青空に浮かぶ雲を見つめフーッと息を吐く、私はそんな時間が大好きだ。

そんなある日、散歩の途中、車が過ぎるのを待つため、私は道端に避難した。そうすると、知らないおじさんが「大丈夫かー？」と声をかけてくださった。私が、笑顔で「はい！」と答えると、おじさんは「気をつけてな～」と温かい微笑みをくれる。私は、いつもより車通りを確認し、青い空に微笑みを浮かべてしまうほどの嬉しい気持ちになったのだった。それからのこと、私はたくさんの人に声をかけられるようになったのだ。別れ際には、必ず「気をつけてな～」「はい！」と交わして。

外に出れば、車いすに乗っている私を不思議そうに見つめる人々がほとんどだ。お母さんに手を引っ張られながら、それでもロボットのような大きな乗り物を見たくて、私の方に振り返っている子どもたち。私は幼い頃から、たくさんの人の視線に注目され、生きてきたのだった。私は、変わったものを見るかのような、そういう目が、たまらなく嫌いだ。勉強が苦手な人、運動をするのが不得意な人、目が見えにくいため眼鏡をかけている人、すべてにおいて完璧にできる人なんていない。私は、歩きにくいため車いすに乗っている、ただそれだけのことだ。

そんな私は、中学生の時から続けている趣味がある。それは、作詩だ。イヤホンで音楽を聴いていると、不思議と言葉が浮かんでくるのだ。私は、自分の詩を曲にしたいという思いがいつしか大きく膨らんでいったのだ。そして、高校三年生になり、ある先生と出逢う。先生は普段から、私達高校生のしょうもない悩みを、どんなときも懸命に聞いてくださった。そんなある日、先生は私達に弾き語りを聴かせてくれたのだ。この人しかいない！と、とっさに思ったのだろう。「この詩を曲にして、好きな人に届けたい」と私は言葉にしたのだった。先生は「ええで！」と、快く引き受けてくださった。そして、その二ヶ月後、完成した曲を私の目の前で、披露してくれたのだ。ギター一本と、先生の優しい声で奏でられる、七分間のラブレター。夢を叶えられた喜びや、先生に対する感謝の気持ちなど、様々な思いが重なり私は、涙があふれたのだった。

また、ある先生は、私の詩をより多くの人に届けたいという思いから、詩集を作ろうと提案してくださったのだ。さらに、全国高等学校文芸コンクールに応募してみないかと薦めてくださった。するとなんと、優秀賞に選ばれたのだった。長年に渡り、積み重ねてきたものが世の中の人々に認められ、私はただただ嬉しかった。先生と出逢わなければ、私はこんな素敵な思いなど、決して味わえなかっただろう。

素敵な出逢いは、現在の職場でも続く。私は、全面介助してもらわなければいけないので、家族以外の人と一緒にいなければならない時は、脱ぎ着させやすいラフな服装を選ぶことを常に心がけていた。だけど、職場で私の介助に携わるスタッフさん方は、「スカート履いてきてよ、オシャレしてきてよ！」と私におっしゃってくださる。私がオシャレすることに、賛成してくれるのだ。ファッションや見た目などにこだわりが強く、いつだってオシャレでいたい私にとって、その言葉は何にも変えられない宝物となった。

職場には、まだまだ新米な私を頼ってくれる先輩がいる。生きていたら、楽しいことばかりではなく、苦しさや寂しさなどを感じる日が訪れるだろう。「りりこちゃんには、なぜかなんでも話せてしまうよ。りりこちゃんの言葉で前に進めるよ。」と、彼女は私に悩みを打ち明けてくれるのだ。私の言葉で、少しでも心が軽くなるのだったら、いくらでも力になってあげたいと思う。

誰かと出逢うことは、自分の人生に大きな変化をもたらし、新たな自分を発見できることと私は考える。また、言葉ひとつは人の気持ちを、大きく左右させる。だから、言葉ひとつひとつ、大切にしなければならない。

誰かの優しさに触れ、また誰かに優しく触れられることができる、人と人の繋がりを私はこれからも大切にしたい。

小学生区分
香川県健康福祉部長賞

心のバリアフリーが広がる社会に

多度津町立多度津小学校　六年
大山（おおやま）　凌雅（りょうが）

ぼくのお母さんは、介護士をしています。コロナが流行する前には、用事のあるお母さんに連れられて、老人介護施設に行った事があります。そこでは、ほとんどの人が車椅子に乗っていて、ぼくは正直に言うと違う世界に迷いこんだかのような、不思議で少し怖い感覚におそわれました。

よだれがたれてしまっている人、足が一本しかない人、時々、大きな声をあげている人どの人も、ぼくの日常生活の中では見た事のない人でした。お母さんが用事をしている時におばあさんが話しかけてきました。一生けん命何か言っているけれど、ぼくには理解できませんでした。お母さんがもどってきて、その人が家に連れて帰ってと言っていると教えてくれたけれど、何でお母さんには分かったのかと思いました。

それからぼくの中で障害者とは、お母さんの職場にいるような人という認識でした。

今年はオリンピックが開催されました。香川県内に聖火リレーも来て見に行きました。そこで観音寺のリレー走者に障害がある毛利さんという方が走ると知りました。ぼくは、正直障害がある人が走れるのかとてもぎ問でした。けれど、テレビの特集で毛利さんがそうぜつなリハビリをしているのを見ました。毛利さんは首の骨を折る事故のあとは、「一生ねたきり一生呼吸器でこの生活を覚悟しなさい。このじょうたいから歩けるようになった人は、世界に一人もいない。」と言われたけれど、それなら自分が歩いたら世界で一番初めの人になれると思ったと話していました。ぼくならあきらめてしまうけれど、毛利さんは、あきらめず当日も最後まで走りきっていてとてもすごいと思いました。

どこか遠い存在だった障害者は、意外と近くにいて、工夫しだいで仕事だってできるし、あたりまえだけどぼくと同じ人間ということが分かりました。最初からかべを作って接するのではなく、同じ人間として関わっていく事で、心のバリアがはがれ、心のバリアフリーが実現すると感じました。

東京オリンピック、パラリンピックでより世界中の心がつながってほしいと思いました。

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

思いやりのスポーツ

高松市立国分寺南部小学校　二年
川井（かわい）　悠暖（はるの）

わたしは、まい月だい二にちよう日に、おばあちゃん、いとこ、かぞくといっしょに、ふうせんバレーサークルにさんかしています。そのサークルは、子どもからお年よりの人、そして、しょうがいのある人、ない人もみんなでいっしょに、ふうせんバレーをたのしんでいます。じゅんびやかたづけも、みんなできょう力しながらしています。

ふうせんバレーは、バドミントンコートにネットをはってします。ボールは、丸くて大きめのふうせんに、すずを二つ入れて、四十センチメートルくらいにふくらませたものをつかいます。大きいふうせんがゆっくりはずむので、小さい子やお年より、しょうがいのある人でもやりやすいです。そして、うった時にすずの音がなるので、目がふじゆうな人にも、ボールがどこにあるかわかりやすくてあん心です。

ふうせんバレーのルールの中で、一ばん大切なことは、「チームのぜんいんが、かならず一どはボールにふれてから、あい手コートにかえす」ということです。うつ時は、つぎの人がうちやすいように、考えてうちます。ボールを高めにうつと、ゆっくりふわふわとおちてくるので、その間に、つぎにうつ人がボールの下へいどうできます。また、車いすの人にパスをする時は、手がとどくところにボールが行くように、とくに気をつけます。上手くパスが出きなかった時は、ほかの人たちがつないでたすけ合います。そして、まだボールにさわっていない人は、声を出したり手を上げて合図をしたりします。さいごにあいてコートにかえす時は、「かえすよ。」とか「〇〇ちゃんかえしていいよ。」と、チームのみんなで声をかけ合います。

そして、上手にうてた時は、「上手い、上手い。」とほめてくれるので、わたしはうれしくて、「もっとがんばるぞ。」と思います。また、しっぱいした時は、「おしい。」とか「ドンマイ。」と、はげましてくれます。「くやしいけど、つぎはがんばるぞ。」と思います。

わたしは、ふうせんバレーはチームのみんなが思いやりをもって、きょう力することが大切なスポーツだと思います。これからも、れんしゅうをがんばって、上手にパスができるようになりたいです。そして、ふうせんバレーいがいの時も、いつも思いやりをわすれずに、まわりの人にやさしくしたり、こまっている人がいたら声をかけてあげたいです。

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

家族の絆

丸亀市立東中学校　一年　西岡（にしおか）　亜美（あみ）

私の父は、障害者です。現在、車いす生活をしています。なぜなら、病気で歩くことができなくなったからです。私が、小さい頃、父が歩いている姿を見たことはありますが、杖を持っているところです。運動会や授業参観などの学校行事には参加したことがありません。階段等の段差があると、車いすでも移動する事ができないからです。一度、幼稚園の頃、車の中から私が踊っている姿をビデオでとってくれた事があります。今まで、真近で見てもらったことがなかったので、とてもうれしかったです。今では、母がとったビデオをニコニコしながら見てくれています。父は、「自分も元気だったら、一緒に親子で出る競技に出たい。」と言っていました。

障害者の人の気持ちは、一緒にいる家族でも分からない事がたくさんあります。例えば、私の家はほとんどがバリアフリーでないので父はかなり苦労しています。部屋が狭く、方向転換が自由にできないので、段差がない所を探して何回も切り返しています。私が身勝手に置いた荷物が邪魔で苦労している事もあります。私からしたら、これぐらい大丈夫だろうと思った事でも、父からすれば通り道を阻害されてしまう事になるのです。ある時は、母が言っていました。先日、ヘルニアで一ヶ月車いす生活した友人が言っていたのだけど、「車いす生活して初めて、大変さが分かった。」と。私も母も、父の大変さは十分理解していると思っていたけれど、車いすの大変さは本人でないと分からないのだと。

父は、不自由な体でも家の事をよくしてくれています。洗たく物は、ハンガーが高い所にあるのにもかかわらず、時間をかけて干してくれています。たまに、しわしわに干されていますが、がんばって干してくれた姿が目に浮かんでくるので、しわしわに干されても、感謝の気持ちの方が強くなります。父は体の不自由な事に対して、ぐちを言った事がありません。自分でできる事は人に頼らず、苦労してでも自分でしようとします。だから、私は父に甘えて、つい助けてあげることを忘れてしまうことがあります。自分でできる事は自分でするという父はすばらしいと思いますが、こうして欲しいと父からも頼ってきて欲しいです。私は歩く事もできるし、車いす生活をした事がないので、父の不自由さの全て分かるわけではありませんが、家族なのだから私にできる事はしてあげたいです。

障害者を持つ家族として悲しい事があります。それは、車を障害者スペースに車を駐車する時です。父は、県が発行している「かがわ思いやり駐車場利用証」を車のミラーにつっています。けれど、外からは分かりづらいのか、知らない人も多いのか、障害者として見られません。だからそのスペースに駐車すると、特にお年寄りの方にじろじろ見られます。おそらく、若いのにここに置くなんてと思われているのでしょう。車いすに乗っていなければ分かってもらえない辛さがあります。

残念な事ですが、障害者の人達の気持ちを百パーセント理解する事は、健康な人達からすれば難しいでしょう。ただ、一緒にいる家族からすれば、できるだけ負担を軽くしてあげたいという気持ちは強くなります。私達家族の場合は、一人一人の力は弱いですが、その分三人で協力し合う事が増えました。例えば、普通なら父に頼る力仕事を三人でしたりと。

人は誰でも弱い所を持っています。けれど、お互いにその弱い部分を補っていけば上手くいくものだと思います。健康な人達でもこの事は一緒だと思います。一人一人が思いやりの気持ちを持てば、絆は自然と生まれるものだと信じています。

中学生区分
香川県健康福祉部長賞

父から学んだこと

匿名希望

私は、今年五月に父を病気で亡くしました。父は病気になる前の健康な時から、臓器提供の意思表示をしていて、病状から提供できるところは角膜とお医者さんから説明を受けました。

角膜とは、目を構成する層状の組織の一つであり、黒目の先頭にあるコンタクトレンズのような透明の膜のことで、病気によって角膜の透明性を失うことで視力に支障をきたします。

現在、香川県では二百六十名を超える方々が香川アイバンクを利用して角膜移植を受けており、視力を回復されているそうです。父が提供した角膜も、二名の方に移植が行われ、順調に回復していると報告をいただきました。

私の父は、製薬会社に勤めていたことから、医療に貢献したいと、常日頃から臓器提供に協力するという意思表示をしていました。死に直面したときも、その意思は変わりませんでした。父が臓器提供に協力したいという考えを迷わずに保険証の裏に署名していたり、自分の余命が伝えられても、意思を変えずに協力した姿から、私は体の不自由な方への勇気ある決断や意思を曲げない姿勢に感動し、尊敬しました。また、母から聞いた話では父が臓器を提供することで、この行いが巡り巡って家族の救いになるだろうと語っていたそうです。私は父の家族への思いに感動しました。私は父の姿から誰かの役に立ちたいという思いと勇気をもって行動しようという強い決意をもらいました。

過去に角膜移植を受けた方から、

「目の光だけでなく、人生の光を得ました。世界がとても明るくなりました。あんなに苦しんだ目の痛みから解放されて、ようやく生きていくのに前向きな気持ちになれました。」

と喜びのメッセージや厚生労働省、日本アイバンク協会からの感謝状を見たときには、父を誇りに思いました。コロナ禍のため、入院中に親せきや友人に会えなかったこともあり父とは寂しい別れとなりましたが、角膜を提供したことによって、二人の方の光として父の思いが生き続けていることを、最後に父と会えなかった人たちに伝えたいと思います。

生まれながらや事故、病気で目に障がいをもっている人や父のように病気で身体が不自由になった人に日常生活で関わることがあったとき、自分ができることを考えて動ける人間になりたいと思います。

自分が障がいがある人にできることとして、耳が聞こえない人と関わるときには手話で会話をできるように学びたいと思っています。私は、中学一年生の時、地域交流学習という行事で手話を少し習いました。耳の不自由な方、手話のできる方に教えてもらい、ダンスを手話で踊ることや自分の自己紹介を目の不自由な方に手話で伝えるという交流活動もしました。ここで私は、手話をする時に手で伝えるだけでなく伝えたい言葉を口も動かして、表情もつけながらすること、そして一番大事なことは伝えたいという気持ちが大事だと知れました。手話で「あいうえお」や自分の名前、あいさつができるように、まずは一日一語おぼえることに挑戦したいです。そして気持ちを大事に手話にチャレンジしたいです。私が行動することが、誰かのために役に立つと信じて前向きに行動していきます。

父から学んだことを、忘れずに健康であることを大切に身体の不自由な方々に今、自分にできること、これから自分ができることをしていきたいです。

中学生区分

香川県知事賞

相棒

内閣府 佳作

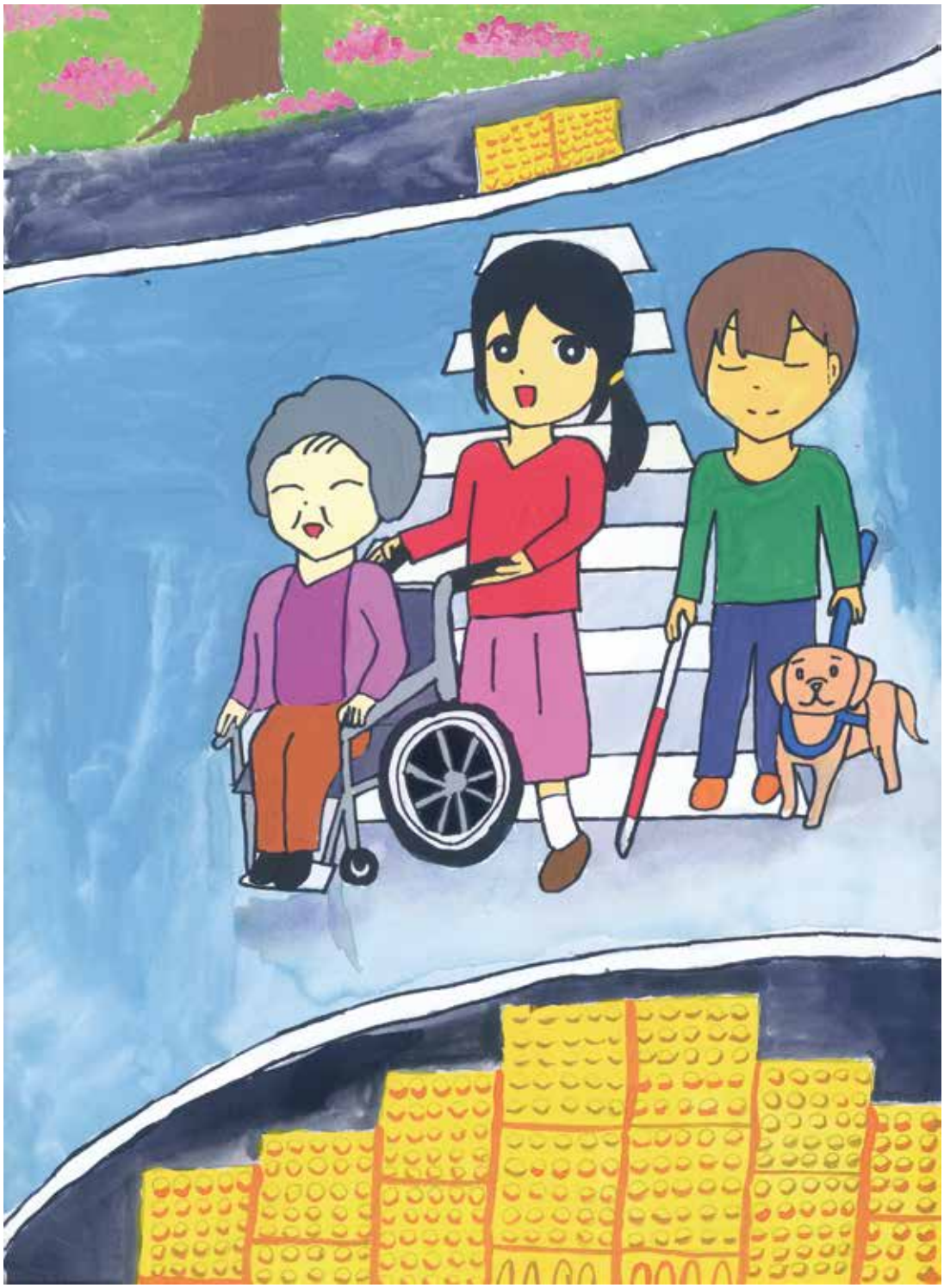
綾川町立綾南中学校 三年

田中（たなか） 遥琉（みちる）

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

みんなが笑顔になる街



三木町立平井小学校　六年
小林（こばやし）　文香（ふみか）

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

仲よくジャンケン

三豊市立下高瀬小学校　四年
藤田（ふじた）　悠月（ゆづき）

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

いろいろな人が共存できる町

高松市立紫雲中学校　一年

菅（すが）　紅羽（くれは）

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

夢を追う者

観音寺市立観音寺中学校　三年
原（はら）
穂花（ほのか）

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2021

優秀作品集

香川県 健康福祉部 障害福祉課
〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

令和3年度人権啓発活動地方委託事業（法務省）

令和３年11 月発行